

# 人間の教育としてのリベラルアーツ

山田 耕太 ● 敬和学園大学長

「人間の教育を受け持つ者」(プロタゴラス)

## はじめに——リベラルアーツの源

大学は中世ヨーロッパの修道院のリベラルアーツ教育から誕生した。ところで、リベラルアーツとは何であり、どのように形成され、どう発展したのか。

ヨーロッパでは古代ギリシア・ローマ社会から中世のキリスト教社会を経て近世に至るまで、自由人の教育のために「リベラルアーツ」と呼ばれる「自由(学芸)七科」が教えられてきた。すなわち、「三科」と呼ばれる「文法学」「修辞学」「論理学」と、「四科」と呼ばれる「代数学」「幾何学」「天文学」「音楽(理論)」である。その源は、紀元前4世紀のアテネの黄金時代にイソクラテス、プラトン、アリストテレスの3人が始めた私塾的な学校にさかのぼる。

イソクラテスはソクラテスの弟子でもあり、ゴルギアスの弟子でもあった。民主主義社会の指導者に欠かせない「演説」の方法を教える「修辞学校」を始めて、「修辞学」を教えた。

プラトンは師のソクラテス没後にピタゴラスの影響を受け、当時アテネの北西の郊外であった「アカデミア」で学校を開いた。そこで教えたことは、プラトンの『対話篇』として残されている。プラトンの学校では、オルフェウスに由来するピタゴラスの学問の影響を受けて「代数学」「幾何学」「天文学」「音楽(理論)」を教えた。それらはまづめて「数学」と呼ばれた(後の「四科」)。これらを基礎として、上級の学問である「哲学」(ピタゴラスに由来する言葉)として「対話法」を教えた。

アリストテレスはプラトンの弟子であったが、師

の死後、当時アテネの東の郊外であった「リュケイオン」で学校を開いた。そこで教えたことは「アリストテレス全集」に残されている。アリストテレスはプラトンのイデアの世界を否定し、イデアの世界に導く「真理」ではないとプラトンが退けた「真理らしきもの」を根拠にする「修辞学」や「詩学」(悲劇・喜劇などの文学)も学問体系の中に含めた。すなわち、理論学である「数学」「自然学」「神学」、都市国家での実践学である「政治学」と「倫理学」、ドラマの制作術の「詩学」と演説の制作術の「弁論術」(修辞学)、さらにこれらの学問と技術の「道具の学」(方法論)としての「論理学」(弁証術)である。

## 1 リベラルアーツの形成

紀元前4世紀に、アレクサンダー大王が登場して都市国家を滅ぼし、圧倒的な軍事力を背景にした帝国が出現すると、ストア派、エピクロス派、懐疑派という折衷主義の哲学が広まった。とりわけ、ストア派では「言葉の学」(後の「三科」と呼ばれる「文法学」「修辞学」「論理学」を基礎に学んだ。

「三科」と「四科」の統合は、ソフィストのヒッピ

アスが「修辞学」の一部の「記憶術」と「四科」を結び合わせたことに起因する。アレクサンドリアのフィロンの著作を見ると、紀元前1世紀頃には「三科」と「四科」で構成された「自由七科」が既に形成されていたことが分かる。

「自由七科」は互いに繋がりが合った「二つの真理」の「多様な面」と考えられ、「円環的なバイディア」(エンキュクリオス・バイディア)とギリシア語で呼ばれていた。ローマのワッロやキケロは、それをラテン語で「フマニタース」(人間性)と訳した。

フィロンは、「自由七科」を「無教養」と「教養」の中間の「前教養」の段階に位置付けた。ユダヤ人のフィロンにとって、「教養」とは「哲学」そのものであったが、その内容は「旧約聖書」の哲学的な解釈、すなわち「神学」であった。フィロンに由来して、中世思想を支配する「哲学は神学の奴婢」というスコラ哲学の枠組みが形成されていった。

リベラルアーツ「自由七科」の「言葉の学」と称された文系「三科」と「数学」と称された理系「四科」は、現代流に表現し直せば、「コミュニケーション学」と「数学」に裏打ちされた「世界観学」、ある

いは「宇宙論」ということもできよう。

## 2 リベラルアーツと大学

12世紀ルネサンスにおいて、修道院のリベラルアーツ教育を土台にして専門教育の学部ができ、大学が誕生した。すなわち、アルプスの南側のポロニーヤでは法学部、サレルノでは医学部、アルプスの北側のバリでは神学部が創設されて大学が始まった。中世の半ばを過ぎると、大学は「リベラルアーツ学部（後に哲学部と呼ばれる）」「法学部」「医学部」「神学部」の4学部体制になってヨーロッパ各地に広まり、中世末期までにその数は70を越えた。

リベラルアーツ「三科」の「文法学」の初級文法ではギリシア語やラテン語の文法を学び、上級文法はギリシア・ローマの哲学書、歴史書、文学書（抒情詩・叙事詩・悲劇・喜劇）を素材にして学んだ。そこから「哲学」「歴史」「文学」という「人文学」（フマニタース）の柱が分れていき、知性とともに感性が磨かれた。「修辞学」と「論理学」では議論の方法を身に付け、リベラルアーツの「四科」の「数学」では理性が培われ、合理的精神が養われた。

学を擁護するアカルトの「方法序説」が登場した。従来の「三科」と「四科」という領域は時代の変遷とともに「人文学」と「自然科学」へと拡大し、また拡散していった。しかし、その精神は残った。フランシス・ベーコンは「学問の進歩」において、従来の人文学の方法論である演繹法に基づいて、「人間の知である学問」の「文学・歴史・哲学」と「神の啓示による学問」の「神学」を分けて述べた。また、新しい科学の方法論である帰納法については「ノウム・オルガヌム（新機関）」で述べ、さらに、科学の研究を促す研究機関については最晩年の「ニュー・アトランティス」で構想した。それは、その三、四十年後に発足したイギリスの王立学士院やフランス学士院の設立を促した。

アカルトの科学的精神に基づく哲学に対して、一方では、パスカルが「原バンセ」ともいべき「愛の情念について」と、それを展開させた「バンセ」において、科学的精神の「幾何学的精神」に対して人文学的精神でもある「繊細な精神」を立てて、両者が必要であることを述べた。他方、「歴史哲学の父」ヴィーコは「学問の方法」で、科学的精神の「新

しかし、大学が発足するはるか以前、紀元前4世紀のヒポクラテスの時代から同業者間で医学の技術教育が行われ、紀元2世紀からアレクサンドリアをはじめとする各地では神学の実践教育が行われ、6世紀のユスティニアヌスの時代から東ローマ帝国ではローマ法の実務教育が行われていた。

大学は「普遍的な価値観」を養い、知性や感性や理性によって「人間性」を培う「リベラルアーツ教育」を土台にして、裁判官・医師・聖職者など国家が要請する専門職を育成するための「専門教育」を施すという点で、それ以前の「技術教育」「技能教育」とは時代を画している。

## 3 リベラルアーツの展開

宗教改革による信仰の再発見と強調によって、理性と信仰は遊離し、理性を土台にしたリベラルアーツと哲学、またその上に築かれた信仰による神学という中世のスコラ的枠組みが崩れていった。

ほぼ同時期に、コペルニクスやガリレオらによる天文学的発見によって、プトレマイオスの天文学は崩れ、天文学をはじめとした科学革命が起こり、科

しいクリティカ」に対して、修辞学に基づく人文学的精神の「古いクリティカ」の復権を主張した。

18世紀の啓蒙時代に哲学部の教授であったカントは、最後の著作「諸学部の争い」の中で、上級学部の神学部、法学部、医学部に対して、下級学部の哲学部の立場を擁護し、神学・法学・医学という実用的な学問に対して、国家の要請から自由で理性に基づいて根源的なテーマを論じる哲学の復権を訴えた。

さらに、米国の独立やフランス革命などによって市民社会が成立すると、自然科学の方法論を準用して社会を分析しようとする「社会科学」が興ってきた。その先駆はアダム・スミスの「経済学」である。「経済学の父」アダム・スミスは、出発点で「修辞学講義」「法学講義」「哲学史」を論じ、道徳哲学で「道徳感情論」と「国富論」を論じて出版した。それは、アリストテレスの学問の枠組みを自然神学・自然倫理学・自然法学に書き改め、アリストテレスの弟子による偽書であった「家政学」（すなわち「経済学」）を新たな視点と方法論で書き改めたものである。

## 4 リベラルアーツと科学

産業革命の19世紀に入ると、中世以来の大学の教育機能（人間教育と専門職教育）に研究機能が加わった。それは大きく次の二類型に分かれる。

第一に、フイヒテ、シユテフェンス、フンボルト、シユライエルマツハーの大学の理念に基づいて、科学的探究を主眼として創立されたベルリン大学の類型である。そこでは研究と教育は一致し、融合すると考えられていた。この大学の理念は、ヤスパースの「大学の理念」に継承され、現代ではガダマーの「大学の理念」に受け継がれている。

第二に、これとは対照的に、英国のニューマンが学長就任と前後して「リベラルアーツ」による人間教育（一九世紀の表現では「紳士教育」）を目的にした「大学の理念」を語り、出版した。この大学の理念は、スペインのオルテガの「大学の使命」に継承された。そこでは「リベラルアーツ教育」を根幹に据え、その外側に専門職の「専門教育」、さらにその外側に研究所と連携した科学的探究を置いた。現代ではペリカンの「大学とは何か」に継承されている。

米国では、この欧州の二類型は基本的にリベラルアーツ教育による学部教育と科学的探究による大学

院教育という二重構造に分かれて受け継がれた。日本では、戦前は欧州型（旧制高校／私大・第二類型、旧帝大・第一類型）の影響を受け、戦後はその影響が米国型に変貌している。

## 5 20世紀のリベラルアーツ論

20世紀にはさまざまなリベラルアーツ論が出現したが、その代表的なものはハッチンズとロソフスキーのリベラルアーツ論である。

ハッチンズは20世紀前半に30代の若さでシカゴ大学の学長に就任した。しかし、自分の無教養を恥じて、学長職の忙しい合間を縫って古代から近現代に至るさまざまなジャンルの古典を読んだ。その経験から、10年かけて180冊の西洋の古典を読む「グレートブックス」というブックスを作成し、シカゴ大学で実践した（『偉大な会話』）。

この手法は、現在の日本の大学でも文学史や思想史などの講義に取り入れられている。また、同僚のアドラーと共に、経済界の指導者の研修に「グレートブックス」を取り入れて、それを実践する場としてアスペン研究所を開設した。学長退職後は「プリ

タニカ百科事典」の編纂と生涯教育に力を注いだ。ハッチンズが過去にさかのぼって偉大な魂と対話したのに対して、ロソフスキーは未来へと向かう。ロソフスキーは日本や東アジアの経済史家で、ハーバード大学文理学院の学長時代に、コア・カリキュラム作成の前段階として、大学教育を受けた教養人の基準に次の5点を挙げている（『大学の未来へ』）。

- ① 明瞭かつ効果的に考えて書く。
- ② 宇宙や社会や人間の知識を批判的に考える。
- ③ 異なる文化や価値観を受け入れることができる。
- ④ 倫理的な問題への理解や判断基準を持つ。
- ⑤ 一つの分野について、深く探究する。

これは本学もそうであるが、大学のカリキュラムポリシーや、その前提となる「大学教育を受けた人間像」が準拠しているものである。文部科学省の最近の「学士力」や「学力の三要素」も、さかのぼればこのような人間像が前提になっていると思われる。

## おわりに——実践するリベラルアーツ

20世紀後半からの情報革命による情報社会の中で、

大学教育も大きく変貌しつつある。一方ではグローバルイニシアシオンが、他方ではローカリゼーションが同時に進行し、また地域間格差が大きくなり、地方創生策や地域再生策が採られつつある。

現代の大学には、教育・研究機能の他に社会貢献機能と組織としての管理運営機能が求められ、それらがますます大きくなりつつある。同時に、社会貢献は地域貢献の色彩を強め、管理運営では経営的視点を強化せざるを得ない状況になっている。

日本の大学も、18歳人口の50%以上が大学に進学する「ユニバーサル段階」に入り、教育機能も大きく脱皮しつつある。大学教育は教育過程の最終段階から生涯学習の初期段階へと位置づけ直し、「教育の主体は教員」から「学習の主体は学生」へと転換する。問題発見と解決の方法論を身に付け、大学での学びと地域社会での学びをフィードバックさせて学ぶ時代に入ってきた。こうして、「リベラルアーツ」は「実践するリベラルアーツ」へと変貌する。だが、中世以来のモットー「真理はあなたがたを自由にする」（ヨハネ福音書8・32）に変わりはない。